材木から桶まで、木をあつかう職人が大集合！

⑪南大工町
（現・八重洲二丁目、京橋二丁目）

町名は、大工が住んでいたことに由来する。「大工町」は、もともとAエリアの⑰（→p.151）の町名だったが、1690（元禄3）年に一部の人々がこの地に移住し、もとの大工町と区別するために「南」をつけて町名とした。

⑫南鍛冶町
（現・八重洲二丁目、京橋二丁目）

町名は、江戸時代の初期に、熱した金属をたたいて道具をつくる、鍛冶職人が多く暮らしていたことに由来する。神田の鍛冶町（現・千代田区）の一部の人々が移住してできた町で、神田の鍛冶町と区別するために、「南」の字が加えられた。

⑬桶町
（現・八重洲二丁目、京橋一～二丁目）

桶町は、桶職人が住んでいたことからつけられた町名。桶町では棺桶もつくった。

茶の湯がさかんだった!?

⑭元数寄屋町
（現・銀座五丁目）

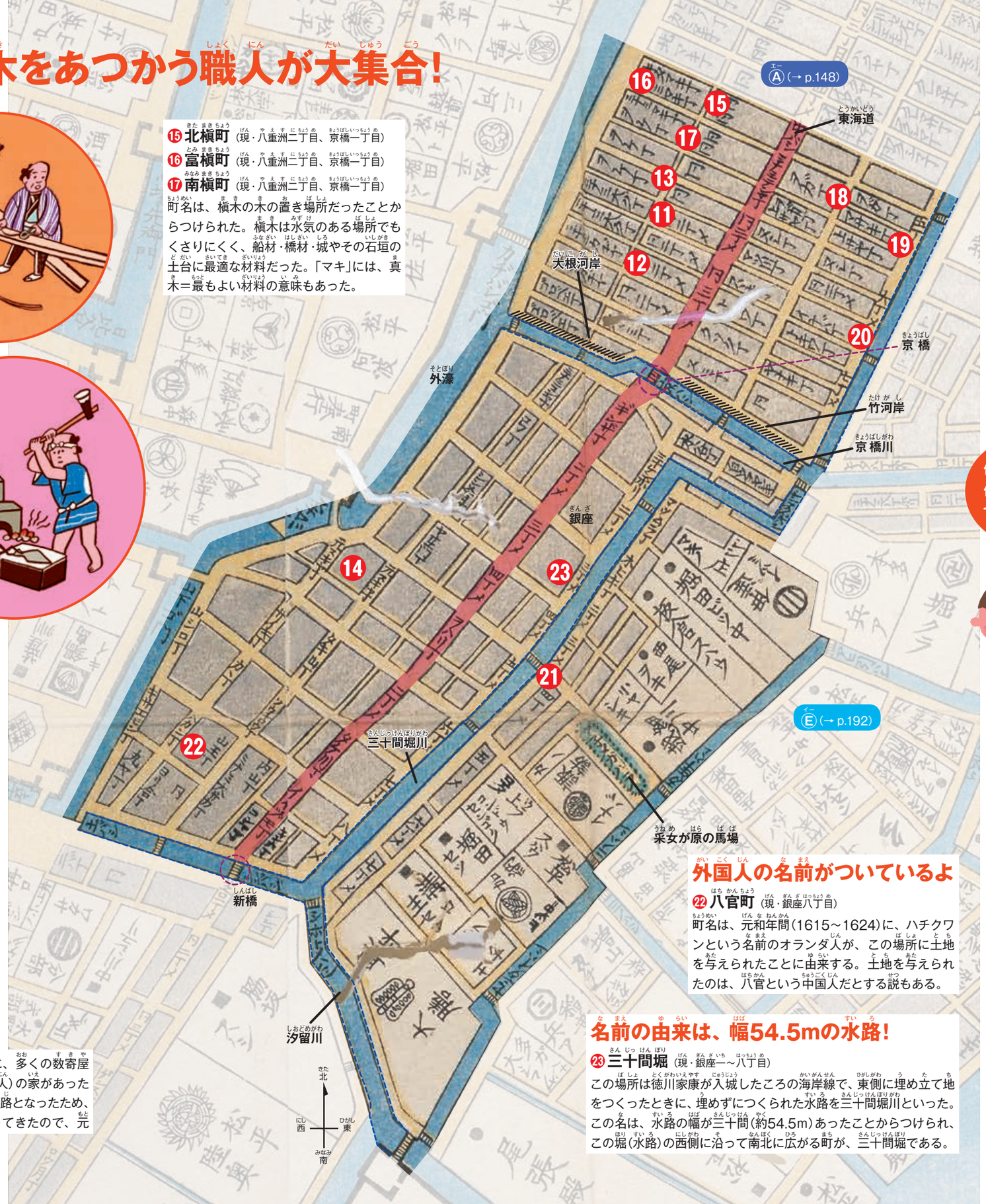
町名の由来は、この地にあった織田有楽斎の屋敷内に、多くの数寄屋（茶室）があったからとも、数寄屋坊主（茶に関する役人）の家があったからともいわれる。この町は1698（元禄11）年に、広小路となったため、日本橋方面に移転した（→p.151）。その後、町が戻ってきたので、元数寄屋町と名づけられた。

⑮北槇町
（現・八重洲二丁目、京橋一丁目）

⑯富槇町
（現・八重洲二丁目、京橋一丁目）

⑰南槇町
（現・八重洲二丁目、京橋一丁目）

町名は、槇木の木の置き場所だったことからつけられた。槇木は水気のある場所でもくさりにくく、船材・橋材・城やその石垣の土台に最適な材料だった。「マキ」には、真木＝最もよい材料の意味もあった。



外国人の名前がついているよ

㉒八官町
（現・銀座八丁目）

町名は、元和年間（1615～1624）に、ハチクワンという名前のオランダ人が、この場所に土地を与えられたことに由来する。土地を与えられたのは、八官という中国人だとする説もある。

名前の由来は、幅54.5mの水路！

㉓三十間堀
（現・銀座一～八丁目）

この場所は徳川家康が入城したころの海岸線で、東側に埋め立て地をつくったときに、埋めずにつくられた水路を三十間堀川といった。この名は、水路の幅が三十間（約54.5m）あったことからつけられ、この堀（水路）の西側に沿って南北に広がる町が、三十間堀である。

⑱大鋸町
（現・京橋一丁目）

木材を加工する縦引き（木材の木目に沿って切ること）用の鋸をおが（大鋸）といい、町名は大鋸を使う職人が多く住んでいたことによる。もともと「おおかがりちょう」と発音していたものが、なまって短くなり、「おがちょう」になった。

住んでいる人の仕事から町名がついたんだね。

⑲正木町
（現・京橋一丁目）

正木町は材木問屋街で、町名は、そこで取り引きされた樹木・正木の名前にちなむ。正木は生け垣などにつかわれた。

⑳本材木町
（現・京橋一～三丁目）

一丁目から四丁目はAエリアにあり（→p.151）、ここには五丁目から八丁目までがあった。

㉑木挽町
（現・銀座二～八丁目）

江戸城建設のときに船で運ばれてきた材木は、本材木町（→p.151）で陸にあげられた。木挽町はその南の海岸に細長くつくられた町。材木をつかい道に合わせて加工する製材場があり、材木を加工する木挽職人が住んでいたことから名がついた。